

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



撮影 英伸三

あけましておめでとうございます。ポスト冷戦とはいえ、昨年は、ユーゴスラビアの民族衝突、ソマリアの飢餓、あるいはネオナチの台頭など、テレビの画面を通して、心を痛める出来事がすくなくありません。

平和や人権という基本的なテーマについて、人びとの考え方をよい方向に変えるためには、なおいっそうの努力が必要であり、国際理解や異文化理解をすすめることが重要である、と痛感させられました。

第五福竜丸展示館の管理・運営にたずさわるものに課せられた責任の重さについて、改めて考えさせられました。

来年はビキニ事件四十周年に当ります。この間に私たちがおこなってきたことは、原水爆禁止の主張とあわせて、核軍備競争が残した「つめあと」を、被害者の立場、人間の立場にたつて、ひとつひとつ告発することでした。私たちはこれからも、このことをねばりつづけていかなければなりません。

四十周年の前年に当る、ことし一年は、もう一度、ビキニ水爆実験被災の事実と意味について、事件を直接には知らない若い世代を含めて、多くの人びとに考えていただくよい機会だと思えます。そのことよって、平和や人権がより身近な問題となるにちがいないと信じています。

パプルの崩壊、経済の低迷は、学生の就職先が内定していく状況を見ても、ひしひしと感ぜられます。若い人びとにとってはきびしい年です。

考え方をきりかえて、物質的ゆたかさだけを求めるのではなく、精神面での充実をはかること、ひとりひとりの個性をいかしながら、人間らしい価値あるもの追求へと向かってほしいものです。

ひろく世界に目を向け、平和の大切さや人権意識を肌でつかみ、自分の身のまわりでできることは小さなことでも見逃さず、よりよい世界と未来のために、みずからすすんで選択し行動できる人間をこれからの時代は求めています。

「グローバルに考えローカルに行動せよ」、第五福竜丸が若者たちに、そのような方向へのインパクトを与えてくれることを期待しています。

本年は、第五福竜丸平和協会設立二十周年にも当ります。当展示館の設立・維持・発展に力をつくされた多くの先輩諸兄姉及び東京都関係各位への感謝の気持ちを新たにするとともに、ひきつづき皆様のご協力をお願いする次第です。

新年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎



津田 橋冬 カット

大石さんの話を聞いて、なればパネルなどはじっくり見れなかったり、目をそらしていたかもしれない。今までの私は、人間のようない人間がして、情けなかった。ただ、パネルを見て目をそらさなかったのも、自分の心が強く何かを訴えていたのかもしれない。少し強くなったのかもしれない。その日にうかべ

大石さんの話を聞いて、綾部市豊里中学校 丸岡和世

大石さんの話を聞く前はドキドキしていた。第五福竜丸展示館に入ると大きな船があった。予想していた大きさよりもすくなく、話をきいた。自分がいつか船に乗ったかなど、大石さんの気持ちごとくなくわかるような気がした。久保山さんの分まで生きのびるといふような気がした。いっしょに乗っていた仲間の死もつらいことだったんだらうし、自分自身も不安だったのに、真実をそのまま話された。

たぐさんの写真があった。長崎、広島、そして水爆。焼死した男子の写真などがある場所へ私は足をとめた。なにかを真剣に訴えようとしている気がした。その場で私はまぶたがあつくなり、うっすらと目に涙がうかんだ。きもちがわるいとは思わずに写真をみつめていた。胸が痛かった。大石さんの気持ちが伝わったようにも思えた。私は写真を見て思った。「大石さんにくれば痛みなどくらべものにならない。だけど今だけは、大石さんと同じく胸の痛さなのか」。

た涙はもう二度と流せないかもしれないけど、五月十九日の私は今までの自分よりもちがうようにも思えた。少しうれしかった。

●新刊紹介 梅林宏道著 「情報公開法でとらえた在日米軍」

高文研・二五七五円

昨年の第五福竜丸平和協会主催の三・一ビキニデー記念集会では、市民運動家であり軍事評論家の梅林宏道さんに「ブッシュの核軍縮提案とその後」と題する講演をしていただいた。ああそうなのか、なるほどな、と納得できるお話だった。梅林さんは太平洋地域の国境を越えた反核ネットワーク「太平洋軍備撤廃運動(PCDS)」の結成に参加され、現在はこのPCDSの国際コーディネーターをしておられるが、もともとは応用物理の出身である。そのせいでと思うが、彼の議論や話というのは、あくまでも客観的で具体的な事実が基礎になっている。

だから彼にとっては、推測ではなく、根拠のある情報に基づいて重要な意味を持つてくることになる。その彼が四年ほど前から、アメリカの情報公開制度を使って、日本における米軍の活動を明らかにしようとする「仕事」を始めた。

内容は「湾岸戦争と在日米軍」、「太平洋の中の在日米軍」、「在日米軍の兵力構成」、「米軍資料で追った空母ミッドウェイの爆発事故」、「主要な在日米軍基地とその部隊」の各章からなっているが、「ああ、やっぱりそうだったのか」と思う部分と、「え、そんなことになっていたの」と思う部分が出てくる。一読というよりも、手もとに置いておかれることをおすすめする。(服部 学)

大石さんのように、もう一度自分身かわりたいと思う。そして強く生きてゆきたい。(修学旅行の感想文より)

平和教育で平和な世界を 創造できるか ①

藤田 秀雄

わたしの友人のひとりに、あるイラン人がいる。彼は英字新聞に音楽評論を書いたり、家で英語教室を開いたりして生活している。わたしは、ときどき、自分の英文原稿をチェックしてもらったり、生活上の問題を語りあうため、彼の家をおとずれる。彼は、子どもの頃から、イランで政治運動に参加し、ついにイランに居られなくなつて、アメリカに渡り、ボストンで勉強しながら運動を続け、のち日本に移住して、わたしの家の近くに住んでいる。

その彼が、ある日の帰りしな、「平和教育で、平和が得られることはない」といった。このことと彼と議論はせずにかかれたが、このひとは、深く心にこつた。この時、彼がいった「平和教育で」というのは、「日本の平和教育で」という意味であろう。であるとするれば、どんな平和教育が有効なのか、あらためて海外の資料を読みなおしはじめた。

さまざまな平和教育の国際資料には、日本が平和教育の発展した国であると書かれている。たしかに、日本の教員組合は、「教え子を戦場に送るまい」をスローガンにしてきたし、広島原爆資料館を訪れる修学旅行生は多い。全国の大学の調査でも、予想以上に多くの大学教師が平和教育を学生たちにおこなっている(『大学における平和学習』エイデル研究所)。

アメリカの大学では、平和研究をおこなうだけでも困難があるという。ほとんどのアメリカの大学は、企業の金に依存しているが、企業は、平和研究者のいる大学には、金を出そうとしないからである。しかし、日本の平和教育に特徴的なことは、いわゆる十五年戦争の被害と加害の事実を伝えることである。わたしは、こういう平和教育の意義は大きいと思う。戦争を知らない世代が、戦争のおそろ

しさ、原水爆の脅威を知ること、戦争・核兵器否定の心情を育てる。とくに、加害の事実を知ること、国家権力や軍隊とは何かをとらえる重要な機会となる。

しかし、諸外国やユネスコなどの平和教育資料に書かれていることと、日本の平和教育の方向とは、ある点で重要な相違があることに気づかされた。それは、平和のために行動する人を育てようとしているかどうかという点である。

ユネスコ平和教育賞受賞者であるフィンランドのヘレナ・ケッコネンは、

「平和教育の目標は、批判的思考と、めぐまれない人たちの連帯感と共感を、一人ひとりに育て、生命尊重に関する確信と人道的方向づけにもとづいて、より公正な世界創造のために、他の人たちと協力し、行動できる人をつくりだすことである」といい、はっきり、平和のための行動者を育てることを目標にしている。

ユネスコは、七四年に、平和教育の勧告「国際理解、国際協力、国際平和のための教育、並びに人權、基本的自由についての教育に

関する勧告」を加盟国政府に対しておこなったが、このなかの教育政策の指導原則のなかに「個人がその属する社会、国家および世界全体の諸問題の解決へ、すすんで参加する姿勢」がかかげられている。問題解決に積極的に参加する人をつくり出すことが、ここでは求められている。

八〇年のユネスコ軍縮教育世界会議最終文書でも、冒頭で、「軍縮教育は、軍縮に関する教育と軍縮のための教育の両方を含む」とのべ、軍縮促進の行動をおこなす教育(軍縮のための教育)が含まなければならないとしている。

いいかえれば、平和教育には、「平和に関する教育」と「平和のための教育」とがあり、国際的には後者に力点がかけられているといえる。

平和教育に関する国際会議に出席しても、「その教育によって、子どもや青年の態度・行動はどう変わったか」が、ほとんどいつも話題になる。日本の平和教育をもう一歩すすめることをイランの友人は示唆してくれた。(立正大学教授)

過去の歴史に学び未来の平和を願う

立命館大学国際平和ミュージアム

安斎 育郎

立命館大学国際平和ミュージアムは、一九九二年五月一九日に、オープンしました。このミュージアムは、大学の新装の建物であるアカデミア立命21の地階部分約八〇〇平方メートルを常設展示にあてていますが、常設展示のテーマは三つの部分から構成されています。

テーマ1は、日本が起こした十五年戦争についてで、これを軍隊と兵士、国民総動員体制、日本人の反戦活動、植民地・占領地、空襲・沖縄戦・原爆という5部の小テーマに分けて展示しています。展示は、十五年戦争で日本の国民が受けた被害とともにアジア諸国民に与えた加害の面も明らかにしています。また、国民を戦争に駆り立てた総動員体制が軍隊の教育や学問・思想の弾圧あるいは隣組や町内会などを通じて、どのような形で作り上げられていったのか、またそうした体制の下で国民諸階

層は、出征や動員動員をはじめ日々どのような暮らしを強いられていたのかを、当時の豊富な写真や物の展示、わかりやすいパネルなどを使って、順次説明しています。この戦争に反対した民衆、あるいは日本の侵略に抵抗して闘ったアジアの人々にも光をあてています。このコーナーでは、当時のフィルムを写すモニターテレビ、当時宣伝に使われた紙芝居の電動式実演や反戦アニメ「煙突屋ペロー」の実演などのほか、戦時中の町家や居間を再現して当時の灯火管制やラジオ放送を含め、庶民の暮らしの様子をわかりやすく示しています。また、京都に原爆を投下する計画がありました、もし広島型原爆が京都に投下されたらどうなっていたかをシミュレーションする装置もあります。

テーマ2では、ヨーロッパでのファシズムの支配と崩壊を、ポランド、マイダネック収容所から

寄せられた資料やアウシュヴィッツ博物館、フランスのレジスタンス博物館あるいはユーゴスラヴィア国立軍事博物館からの写真などによって展示するとともに、戦争の違法化、戦争責任、残された戦後責任の問題についても、問題提起をおこなっています。強制連行された中国人労働者がたどった花岡鉱山での運命を特集した花岡事件のビデオも、日本の戦争責任・戦後責任を考えるための一つの素材です。テーマ2とテーマ3の間には、ミニシアターと呼ばれるコーナーがあつて、5台のモニターテレビとスライドを使って、新大陸発見以降の世界のさまざまな戦争の悲惨と平和を求める努力の跡をつづった二〇分弱の映写が行われています。

テーマ3は、ベトナム戦争を素材にして、現代科学が戦争に使われた場合の狂気を示すとともに、核軍備競争の現状をシミュレーション装置や世界の有名な漫画家による風刺をまじえて展示しています。このコーナーでは、こうした現代の戦争および戦争の脅威に対して、平和を守り、平和を創造していくための努力についても、非核自治

体宣言モニターなどを通じて、展示しています。

館は、ゆったりとしたスペースで、エピソードでは、戦争以外の「構造的暴力」と呼ばれる貧困や飢餓、環境破壊や人種差別の問題にも目を向ける必要を訴えた大きな写真の下で、ゆっくり感想文や記述をするコーナーも用意しています。

ミュージアム設立の際には、第五福竜丸展示館の方々にも大変お世話になり有り難うございました。私たちのミュージアムにも、数は少ないですが、第五福竜丸やビキニ水爆実験に関する資料を展示しています。この間ミュージアムには、学生、中小高校の生徒や父母、京都や他府県の市民の皆様、あるいは国際平和研究学会や原水爆禁止世界科学者会議に参加された海外の方々など約二万人の見学者に訪れていただきました。ぜひ、民様方も一度当ミュージアムにお越し頂きますようご案内申し上げますとともに、今後とも共同の協力関係およびネットワークができませんことを願っております。

(立命館大学国際平和ミュージアム館長代理)